

## 習熟とは何の謂いか

—— 自律的な判断と行為決定の前提条件をめぐって ——

岡田 敬 司

京都大学大学院 人間・環境学研究科 人間社会論講座  
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

**要旨** 岡田は『自律者の育成は可能か—「世界の立ち上がり」の理論—<sup>1)</sup>』において、自律的判断が可能であるためには、当の判断対象がそこに位置づいて原初の意味を獲得する「世界」が立ち上がっていないと論じた。この原初の意味が与えられてこそ判断主体はこの対象に対する「合理的な」対処行為を決定できるわけである。世界は断片知識群の構造化として立ち上がる。構造を組み上げるのは座標軸あるいはカテゴリーのつながりである。

本稿はこの構造化の進行を担うものとしての「習熟」に着目した。断片知識群が構造形成に転じる契機としての習熟である。習熟によって世界は安定した意味付与母胎となるが、そこには知識の身体化、無意識化の問題が避けがたく待ち受けている。本稿の目指すのはこの問題の解明である。

### 習熟と身体知

辻本雅史は『学び』の復権<sup>2)</sup>の中で、貝原益軒の教育思想の本質は模倣と習熟の過程の重視にあるとした。そして模倣と習熟を「身体知」の獲得だとして、言語知と対比させている。ここから「習熟」を解明する突破口として「身体知」なるものに注目するというヒントが得られる。言語知の身体知への変換、あるいは意識知の無意識知への変換に着目するのである。この場合の無意識知というのはフロイト的な「抑圧された知」という意味ではなく、半ば自動化して意識する必要もない「行為知」のことである。日本の芸道や武道において「型より入り型を出す」と表現されてきたのは、学習の本質が行為型の意識から無意識的(自動的)行為型への深化にあるということだ。

ここで少し厄介なのは、習熟前も習熟後も「無意識的」であり、意識的なのは習熟途上だけだということである。とすれば習熟前の無意識と習熟後の無意識を何をもって区別するか。意識様態では区別はつかないが行為型の有無は歴然としている。学習前の行為には問題の行為型が存在しない

のに対し習熟後にはそれが出現しているのである。

習熟の要点として二つのことが明らかとなった。一つは無意識化、自動化であり、もう一つは行為型(構造)の存在である。この二つが同時に起こると、それは本能の発現とほとんど区別がつかない。それもある意味で当然である。獲得形質は遺伝しないにしても、ある行為型の習熟に有利な遺伝特性をもった個体(群)は自然淘汰を生き抜き、子孫を残すのに有利だったということは大いにありうることである。本能とは言わば何世代にもわたる習熟(無意識的自動行為型の獲得)の産物なのである。

### 行為と言葉

言葉を獲得する以前の子どもの行為は、適応的という意味では十分に知的でありうるが、ほとんどの場合、直接的、全体的な知覚に導かれている。換言すれば状況に支配されている。ヴィゴツキーの表現するところでは「知覚は視野の奴隷になっている。」

「言葉が介在するようになると、自然な全体的

視野の中心以外に言葉によって新たに定着される中心およびその付随点群が現れる。」<sup>3)</sup> もしこの言葉を選んだのが当の子供であれば、その子どもは言葉を媒介することで知覚の在り方を変えたのであり、知覚に導かれる行為も連動して変化させたのである。この言葉が他者から発せられたのであって子どもがそれを解しさえすれば同様の変化が起こる。この場合、行為は他律的に行われたといえるが、自律的になされた前者の場合と見かけほど大きな違いはない。外言が内言に変わったのと大差ない。外言は言葉が社会的共同行為場面で機能するのであり、内言はこれが心内化し、主体が無言で自己刺激する道具となるのである。これが主意的、自律的行為の出現である。

子ども、いや人間にとって自然的視野は定義上操作できないが、言葉と連結するとはじめはともかく、操作できるようになってくるのである。

したがって問題は言葉をはじめとする媒介手段によって、いかに操作不可能であったものが、次に意志的に操作可能になり、そして意志するまでもなく「自然に」操作されるようになるかであり、これを調べてみる必要がある。

### 記憶と言葉

ヴィゴツキーの見解によれば、直接的刷り込みによる自然的記憶と目印記号（結び目、刻み目、言葉など）を伴う文化的記憶との大きな違いは、前者が文字通り自然の成り行きに任せるしかないのに対し、後者ではこの目印記号によって人為的に記憶を喚起することができる点にある。つまり記号を体系的な道具として保持することによって、任意の記憶の刻印や喚起という操作が可能になるのである。

言葉は、最初は他者から刺激されまた他者を刺激する社会的手段であったが、後に有音無音にかかわらず自己が自己を刺激する道具となる。言葉の体系は刻み目や結び目とはケタ違いの多様な記憶と識別されて結びつくことができ、ここにおいて人はいわば任意の記憶を操作する可能性を得るのである。この記憶を元手に想像的変容が可能になってくる。人は事態の「かくあった」あるいは

「かくある」だけでなく「かくあるべし」という目的像をもつことができるようになる。「かくあるだろう」という未来予測はこの変形である。感情がニュートラルになっている分だけより知性化しているといえよう。

記憶はそしてその喚起は、記憶像が自然的印象の刷り込みから言語記号との連結対応を深めていくにつれて、個人特有のものから社会的共有物に変わっていく。言葉は本来社会的に体系化されたものだからである。

このように記憶が言葉によって浸透され、社会化され、意図的操作に従うようになってくると、主体の行為も場面知覚によって自動的に惹起されるものではなく、さまざまな意図や目的意識に沿った企てとなってくる。主体は場面知覚から自由になったのだと言ってよかろう。

### 行為の意図性と無意図性

ここで意識知と身体知の関係と違いの問題に戻ろう。これまでの検討からすれば、主体の行為に自由をもたらすのは意識、それも言語知と行為を結びつける意識である。この結び付けの意識が強いほど行為が意図的になされるという意味で、自由度が高くなるのである。この場合の不自由とは、行為が意識の意図的営為（記号や像の操作）を経ずに、自動的に場面知覚によって決定してしまうことである。

とすれば先に提起した二種類の無意識的、自動的行為はどのように区別されるだろうか。言語習得以前の自然的、動物的行為決定はほぼ全面的に知覚場面と内部情動の知覚場面への投影によってなされる。意識の知的介入の余地はない。一方、言語獲得を成し遂げた主体が意図的にある行為を為す場合でも、当の主体が言語操作の意識をほとんど持たず、無意識的身体知がその文化的行為を為し遂げる場合があり、これを習熟と呼ぶというのがとりあえずの定義であった。ここでは知的介入が無意識的に行われているわけである。

ところで知的介入が行われた行為は文化的行為型として野性的行為型とは区別できるだろうが、当の主体が「自動的決定」に行為をゆだねている

という点では同じではなからうか。つまり文化化という知的介入レベルの違いこそあれ、行為の意図的決定のなさの点では大差ない。そしてこの意図性の意識は主体の言語操作の有無と大いに関係があるというのがヴィゴツキーの見解であった<sup>4)</sup>。

しかし習熟の結果として無意識的、自動的行為が「無意識化、自動化した」言語操作を伴っている場合はどうであろうか。行為決定が自動的であるにもかかわらず結果として出現するのは文化的行為であって野性的行為ではない。この場合、行為の体得が文化的環境のなかでなされたというだけで、環境の全体的印象によって行為決定がなされてしまっているという意味で野性的行為の場合と何ら差がないのではなからうか。環境の種類が何であれ、環境決定を免れて行為決定をなしうることにこそ自由な主意的決定の意味があるのではなかったか。

問題は、はたして無意識的、自動的な言語記号の操作というものが存在しうるのかどうかである。存在しうるとすればいかなる形態でか。言語操作を介在させることによって状況反動的であることをやめて目的志向的になった行為選択が、言語操作をやりつつも状況反動的になれるとすれば、いかなる形においてか。無意識の言語操作はいかに存在しうるのか。「存在しうる」と結論したうえで、その存在様態についての解釈を試みよう。

リベットの実験にもあるように<sup>5)</sup>「手首を起こそう」という意識が起きるのは実際に手首を起こす神経電流が流れてから0.5秒たってからのことである。意志意識は行為選択より後に起こるのである。(筋肉運動の出現はさらに0.2秒遅れる)。これはどのように理解すべきか。私の解釈は、無意識下で流れる電気信号が無意識的自動的言語操作と同じものだとするものである。電気信号が筋肉組織にとっては「手首を挙げよ」という言語指示と同値である以上、この解釈は十分成り立つ。

有声の指示「手首を挙げよう」と無声の「手首を挙げよう」と電気信号化した[tekubiwoageyou]の3者を比べてみよう。有声指示を除くと残り二つは電気信号現象が表に出ていることに注目しよう。無声(内言)の「手首を挙げよう」は言語意識を伴っているが、それは当人の主観で

あって客観的に測定可能な現象は当人の「喉」の筋電位の変化だという。これがさらに自動化して主観的な言語意識を「忘却して」筋電位の変化のみの現象に転じることは考えうることではなからうか。本物の習熟の結果の身体知とはこれのことではなからうか。

### 身体知と無言の言語知

場面知覚は清明であり、それに基づくとみられる行為も適応的であるが、一切の言語的指示を伴わないものを身体知と呼ぶことにしよう。無言の言語的指示を伴うものは、無言とはいえ主観的には言語意識があるから、これが意志的行為であることは明らかである。とすれば、先述の身体知と単なる生理的反射行動との違いはどこにあるか。あるいは純内発的な衝動行動との違いはどこにあるか。答えは簡単である。状況知覚ができており、それに適応的であるかどうかである。

内言は外言に比して文構造上の省略が著しく多く、その分だけ高速化しているといわれる。これがさらに高速化して、もはや言語意識を保ちえないところまで達したのが身体知なのだと考えたい。言語意識化できないとはいえ、超高速での状況解析と対応行為の算出がなされているところが、単なる衝動発露や反射とは違うところである。

この身体知を、無言の言語指示を伴う行為のさらに進化した形と捉えるというのが私の考えである。進化形とはいえ、場面が変動するときなどは再度無言の、場合によっては有声の言語指示(掛け声など)を伴う行為決定に退行する必要もあろう。それでも変動が一定の範囲内であれば身体知が最も適応的であることには違いがないのである。

ヴィゴツキーは人間の意志的、目的志向的行為をつかさどるものを高次精神機能と呼び、その言語記号操作能力との関連を強調したが<sup>6)</sup>、私もこの趣旨をそっくり保全したうえで、身体知を高次精神機能に分類したいと思う。意志や目的の言明は検出不可能なほどにまで高速化しているが、結果としての行為そのものからそれらを逆算的に読み取ることが可能だからである。

## 身体知は超高速化した言語操作を伴っているか

A. N. ソコロフの1969年の研究<sup>7)</sup>によると、自分に向けられた言語行為としての内言には、言語運動感覚インパルスがほとんど現れてこない、構音器官の隠れた心理学的な活動とも言うべき知的行為の常同型と、言語運動器官が参与して言語運動感覚インパルスが強く現れる内的つぶやきとも言うべきものの二種類がある。私の分類した「言語意識を忘却した身体知」と「言語意識を伴う身体知」に対応しよう。

私のもくろみが外れたのは、この二者を超高速の筋電流と並の筋電流の違いとして統一的に把握可能としたことだった。これが間違いと証明されたわけではないが、少なくともソコロフの研究では、言語意識を忘却した身体知となった場合には筋インパルスは超高速化するのではなく消失するのである。これがほぼ同一事なのか、全くの別物なのかを確認せねばならない。(私の期待は、消失したと思えたインパルスがリベットの実験の先行インパルスと同じであることだが、…)

## 自由意志あるいは自律的判断は存在するのか

リベットの実験では「いつ運動を始めるか」については、常に無意識的神経電流が「今だ」という意識に0.5秒先行していた。これは物理的決定を逃れた自由意志や自律的判断が存在しえないことを示しているようだが、同じリベットの第二の実験はこれに重要な修正を要求する。いかなる運動をいかに行うか(行わないか)についての考慮はさきの「今だ」の意識とは別種の意志意識であり、これは前者がすでに無意識的に発動してからでも、その先行意志プロセスを積極的に拒否し、行為そのものを中断したり逆に実行させたりすることで、その結果を制御できるというのである<sup>8)</sup>。

この拒否権を含む第二の意志は実験的には第一のものほど鮮明ではないものの、衝動的な内発力とも言うほかない第一のものに対して、知識と経

験の蓄えに立脚した判断力のものであり、常識的な意味での人格的意志に近いものである。しかもなぜか制御行動の意識に先立つ無意識的神経電流の0.5秒先行を必要としない。

これに間違いがなければ、自由意志は文字通り自制力として、自律的判断力として機能していることになる。

この自律的自制能力の先行電流はおそらくは存在する、つまり無意識的に生じることを否認しないのだが、一般の先行電流が0.5秒であるのに対し、確たる測定ができないほど高速であるようだ。

前節では「身体知としての言語」と「内的つぶやきとしての言語」の違いをソコロフに従って喉の筋電位変動の有無として捉えた。筋電位変動が身体知の方にはなく、つぶやきの方にはあるということであった。身体知はほぼ無意識的な常同知とされている。つまり過去に習得され、今はもはや意識する必要もなくなった行為知である。この先行インパルスが超高速化していても不思議ではない。内的つぶやきは一定の意識を伴う行為であり、明白な、測定可能な先行インパルスを伴う。

これはリベットの二種の行為の区別と矛盾しているのではなからうか。つまり、単純な「今だ」の行為発動には0.5秒先行する神経電流が伴い、複雑な「止めよ」の行為発動の方にはほとんど先行する神経電流が認められないのである。複雑な過程には相応の準備が伴うと思いがちだが、これをどう考えるか。

一方、これとは別に次のような問題がある。どちらの種類の行為にしる、その筋運動と意志意識に先行する神経電流には、それ自体を発動する何かが存在しなければならない。たとえば外部からの感覚入力刺激とか、内側からの表象刺激とか衝動刺激とかである。自由意志によって表象刺激つまり想起による刺激が起こるならば、話は簡単である。そこにいかに高速あるいは低速の神経電流が介在しようと、意志の自律的行為決定は存在したのである。この場合を少し詳しく検討してみよう。

衝動なり外部刺激によって「今だ」の行為指令電流が流れ、それが筋運動に現れる以前に「止め

よ」の制御行為が起こる場合、この「止めよ」の理由あるいは先行原因は多くの学習知識や経験知識からなる複合体である。この価値観なり道徳観は複雑な構成ながら、一般的にはしっかりと定着した「常同知」になっていることが多い。もしもそうであるならば、先の矛盾は見かけ上のものに過ぎない。複雑な構成体であっても、それが定着し安定した判断構造になっておれば、その発動にはほとんど先行電流は不要となるわけである。

一方で、いかに単純であってもそれが常同的なものにまで定着していなければ、そして単発行為は文脈依存的であり、その分常同化しにくいのが普通であるので、その発動にはかなり低速の先行神経電流が必要となるのである。

さらに重要な違いは次の点にある。筋運動発動のためには明らかに先行する神経電流が不可欠であるが、「止めよ」という指令は先行神経電流とその意識に対するものであり、筋運動自体に対するものではないのである。ここでは指令に対する指令、信号に対する信号が存在するのみである。この事情が先行神経電流の計測不可能と関係していると考えられる。

### 「踏み越え」の考察から

中井久夫は意識化、イメージ化、言語化と行動化の関係を考察し、(犯罪へと向かう)衝動が行動化されるか否かを「踏み越え」と「踏みとどまり」の分かれ道における言語とイメージの機能的差異によるとしている<sup>9)</sup>。すなわち言語表象は一次元的で「否定」が可能であるのにたいし、イメージ表象は多次元的で「否定」が不可能である。ここから次の帰結を導ける。「行為発動には言語、イメージともに有用だが、行動化自制には言語表象が不可欠である。」この中井の論は、主観的意識の行為に対する力を少しも疑っていない。行為発動の面においても、行為阻止の面においても。

私が先にリベットの論の検討で注目したのは、行為発動の神経電流がその意志意識に0.5秒先行するのに対し行為阻止の神経電流はその意志意識に対して何の先行も見せないことであった。神経

生理学的には矛盾としか言いようのないこの現象は、行為発動が「今だ」という衝動的信号で可能な単純なものであるのに対して、行為阻止の方がその理由の自己呈示と納得という複雑な意識主観上の作業を必要とすることを考慮すれば、了解可能となる。後者は長時間にわたる思案の持続と展開の結果としての選択である。そこには価値判断を含む人格的内実を総動員したような行為選択がある。そこには行為発動の神経電流のような単純なものではない、持続的な神経電位の励起状態が思考に並行して存続しているであろう。このことは当の「複雑な意識主観上の作業」が定着し、半ば無意識化していたとしても言えるであろう。これを基として「阻止しよう」の意志意識を発動するにはほとんど準備ができていたためにひと押しインパルスで十分だったということであろう。この場合、インパルスの持続時間が短いことと電位差が小さくてよいこととの関係を確認しておかねばならない。さらに、これは自殺や離婚などの複雑な思案を伴う行為発動についてもいえることである。

### 自由と制約と自由意志

自由意志は制約のある自由という条件下でのみ存在意義がある。限界なしの自由では制約に挑む、あるいはそれと折り合いをつけるという意志の働きが無用になってしまうからである。

この指摘は重要である。端的にいえば、リベットの実験での「今だ」の意志意識は自由意志の名に値せず「阻止しよう」の意志意識の方こそが本物の自由意志だということである。「否定」の意志はさまざまな抵抗要素との全人格、全知識を動員した対決含みの判断だということである。

とするとやはり意志意識が「常に」0.5秒神経電流に遅れている、とするのは無理がある。それは自由意志ならぬ衝動的意志あるいは反応的意志にこそ当てはまる。「阻止」意識には先行神経電流が伴わない、というリベットの第二の主張の確認こそが肝要であろう。

## ふたつの自律様態

しかしこの考え方で自由意志を定義すると、反面で無意識的になるまで我有化され内化された身体知の自律としての位置付けが苦しくなる。身体知の方が意志意識の無意識化に至る深化を重視しているのに対し、先ほどの定義は問題と対決・葛藤中の意識様態こそ自由意志の自律の本来の姿だとしたからである。もがきつつある自律の姿と安定状態の自律の姿を共に認めるのが解決法かもしれない。自律の能力は動的にもなり、静的にもなるからだ。

## 心身二元論について

意志意識が脳をはじめとする神経生理学的機構に支えられてはじめて作動する一機能であることと、その機能が逆に部分的にしる神経生理学的機構に作用を及ぼすこととは、はたして矛盾しているのだろうか。

一般には、この二つを同時に認めることはデカルト的心身二元論に陥るとして退けられる。しかし物質の構造化とその機能が素粒子運動レベル、分子レベル、生命レベル、心理レベル、社会的制度的レベルなどの多様な形をとり、そのミクロからマクロに至る諸レベルが互いに還元不可能であることは今日では大方の認めるところである。還元を強行すればそこで元のレベルの何物か、本質ともいえる何物かが見失われるということである。木を見て森を見ないということが起こるのである。

問題は、意識をどんなに微視的に見ても物質過程をそこに見いだせないことだ。この故にこそ意識（心）と身体とはマクロとミクロの違いではなく、本性の違いとされてしまったのである。マクロとミクロの違いであるためには、共通次元が存在しなければならぬ。つまり、心あるいは意識を質量なしの異界の存在とするのではなく、脳、さらには身体全体の物質構造と機能とに不可分につながった存在として、しかもそれら生理機構に還元されてしまわない存在としてイメージする術を見つけないければならぬ。

それができたとすれば、木が森に作用を及ぼすと同時に森も木に作用を及ぼすのと同じ理屈で身体が心に、そして心が身体に作用を及ぼすことも理解可能になるだろう。要は意識や心を高度にかつ複雑に組織化された物質過程と相互浸透したものとして把握することである。

意志意識が物質過程と不可分であるならば意識が電気過程を伴うこと、いやそれに先行されて出現することも了解可能になるし、逆に意識や心の活動としての意志が電気過程を伴うが故に、身体運動を触発あるいは阻止しうることも了解可能になるのである。

## ま と め

本稿では教育学的関心から「習熟とは何か」という問いを立てたが、それは同時に「自律的判断、自律的行為選択はいかに可能か」という私の年来の問題に対する答えの核心部の探索でもあった。それゆえ「自由意志とは何か」「言語知と身体知の関係はいかなるものか」「意識過程と生理学的・物質的過程の関係はいかにあるのか」といったさまざまな難問と絡めて議論を進めざるを得なかった。錯綜した議論の割には得たものは乏しいが、それでも、言語の「習熟による無意識化・身体化」が人間の自律能力のカギを握っているらしいということまではたどり着けたと考える。

## 注

- 1) 岡田敬司『自律者の育成は可能か—「世界の立ち上がり」の理論』ミネルヴァ書房、2011年。
- 2) 辻本雅史『「学び」の復権』角川書店、1999年。
- 3) ヴィゴツキー（柴田義松監訳）『新児童心理学講義』新読書社、2002年、183頁。
- 4) 同書、190頁。
- 5) B・リベット（下條信輔訳）『マインド・タイム』岩波書店、2005年。
- 6) ヴィゴツキー、前掲書、第2部。
- 7) A・Nソコロフ（松野豊訳）「言語運動の求心的作用と脳メカニズムの問題」『ソビエト心理学研究』9・10号、1970年、36-54頁、Sokolov, A. N. (1972) *Inner speech and thought*, New York Plenum Press.
- 8) リベット、前掲書167頁。
- 9) 中井久夫『徴候・記憶・外傷』みすず書房、2004年、304-328頁。

## What Does “Deep Learning” Connote?

Keiji OKADA

Graduate School of Human and Environmental Studies,  
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

**Summary** «Apprendre profondément», qu'est-ce-que cela veut dire?

----Sur des conditions nécessaires du jugement autonome et de la décision autonome des conduites----

J'ai posé une hypothèse dans mon livre ; *Formation des hommes autonomes, est-t-elle possible?* Il s'agissait d' « Autostructuration d'un monde ». Pour juger d'une façon autonome, il faut d'abord un monde structuré dans lequel se situe l'objet de ce jugement. Cette situation nous ayant donné le sens primordial de cette objet, nous devenons capables de décider notre propre conduite « rationnelle » ou « adaptative » vis-à-vis de l'objet.

Ce qui fait la structuration d'un monde, ce sont des axes de coordonnées ou des réseaux des catégories. Cet article essaie d'éclairer le mécanisme d' « Apprendre profondément » qui fait avancer cette structuration. Il nous semble que le moment de la formation d'un monde structuré consiste en accumulation-condensation des connaissances fragmentaires.